

2022年2月20日顕現後第7主日

創世記 45章 3-11、21-28節

コリントの信徒への手紙一 15章 35-38、42-50節

ルカによる福音書 6章 27-38節

先週は、礼拝後に堅信受領者総会の質疑応答の時を持つことができました。対面とネット併用のため、不慣れな部分も多かったかと思いますが、大切なひと時であったと思います。わたしたちのそのような歩みをよそに、教会庭では紅梅がきれいに咲き始めています。もうすぐ春だと告げているようです。

さて、大齋節はまだですが、本日の使徒書も、パウロが「復活」について語っている箇所です。本日も使徒書を中心に学んでいきたいと思えます。パウロは、本日の箇所で、「復活の体」について語ります。つまり、どのような「体」で、「どのように」復活するのかについて語っています。現代人が復活について疑問に持つように、当時の人々も死んだ人間が復活するとはどういうことか、素朴に疑問であったようです。パウロはその疑問に答えているのですが、少し論理的に強引なところがあります。それは、本来、具体的に説明できない事柄を、説明しようとしているからでしょう。

本日の箇所は、「しかし、死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません。」（1コリ 15：35）と「しかし」で始まっていますが、それは、先週の使徒書の続きに、「死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。」（1コリ 15：21-22）とあるからです。そこでは、イエス様の死と復活を、『創世記』にあるアダムの話に結び付けて解釈し、アダムによって発生した「死」が、イエス様によって、本来最初からある永遠の「生」に変わった（戻った）と語っていました。そして、その「生」を希望にして歩むことを勧めていました。しかし、そのように教えられても、「死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか」という疑問は、出たのでしょうか。ここで「復活する」という意味で用いられている言葉の本来の意味は、「起きる、目覚める、起こす」という日常的な動作です。「体」も特別な意味の言葉ではありません。つまり、「(死者が) 起きる・復活」と聞いて、一旦死んで肉体が腐敗し骨を残して消滅した人間が、どのように目覚まして、どんな肉体を持って登場するのかという疑問が出たのでしょうか。

パウロは、最初に「**愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか**」（1コリ 15：36）と語ります。「新共同訳」は、呼びかけるように訳してありますが、後半部分は断言調に訳しても構いません。新しい「聖書協会共同訳」では、「**愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を与えられることはありません**」となっています。ここで言っていることは、単

に「死」があるから「生」になるのであって、「死」がなければ、当然「生」のままだということですが、それをさらに次の節で、「**あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です**」(1 コリ 15:37)と穀物とその種の関係をたとえに用いて、単純なこととして語っています。死んだ人間、肉体の滅んだ人間が、体を持って復活する、それは想像しにくい事柄でありが、種を蒔く時、蒔くのは、麦であれ他の穀物であれ、種であり、最初から成長した植物を蒔くのではない。そのことを考えれば当然だということです。間接的に、蒔かれた種が種のままであれば、植物にはならない。しかし、植物になるということは、そこに変化があるということを語っています。

パウロは、その変化の過程に、主なる神様の関与があることを、次の「**神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります**」(1 コリ 15:38)で示します。そして、パウロはこの後、いろいろな「肉(体)」について語り、また「太陽」や「月」など天体について言及します。その箇所は、使徒書で省略されています。そこで人間、獣、鳥、魚と生き物を羅列します。それは、人間の肉は、特別な存在ではあるが、ただの種であるという意味では、他の地上の生き物と同じである。しかし、そのような肉が、そのまま復活するわけではないと語りたいのでしょう。次に、種、肉と部分的・性質的なことがらに言及したあと、「天上の体」と「地上の体」とふたたび「体」という全体性への言及に戻ります。つまり、地上のものしか見ない場合、天体のことはわからない、つまり「復活」の本質が分からないと主張しているのです。

これらの説明の後が、聖書日課の箇所ですが、そこには「**死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです**」(1 コリ 15:42-43)とあります。様々なたとえから、直接「復活」についての言及に戻っています。パウロは「これと同じ」と断言しますが、「これ」に相当する内容は、すぐ前の41節の事柄(天のこと)と思われまふ。つまり、「天上の体」と「地上の体」とには違いがある。それは「朽ちるか」(地上)か「朽ちないか」(天上)という違いであり、人間は、最初は朽ちるもの(地上)であっても、朽ちないもの(天上)に変えられる、それが「復活」であると説明しているのです。そして、パウロは、「**つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです**」(1 コリ 15:44)と朽ちる体と朽ちない体という二つの体における違いは、ここで一つの結論に達します。種を例に上げ、種は種としては死んでから植物として育つ、新しい命になる。同じように人間の体は朽ちるものであるが、種のように他の存在に連続して変わるわけではなく、再び体を持つ。しかし、星に違いがあるように、体にも違いがあり、再び持つのはこの世の命の体ではなく、全く異なる霊の体であると述べているのです。そして霊の体の存在の根拠は、この世の体そのものであると最後に述べています。何故ならば、この世の体とは、霊に体を生み出す種だからです。

『最初の人アダムは命のある生き物となった』と書いてありますが、最後のアダムは命を与える霊となったのです。(1 コリ 15 : 45) とパウロは、ここからアダムに言及するために、おそらく「創世記」2章7節の一部、「人はこうして生きる者となった」)を引用します。ただし、パウロの引用は、ヘブライ語原典の訳とをもそのギリシア語訳の『七〇人訳聖書』とも少し異なっています。この引用に対比されるような形で次の「最後のアダムは命を与える霊となったのです」が続くのですが、パウロはおそらく、『聖書』の引用に「最初の」という言葉と、「アダム」という固有名詞を加えて、「最初のアダム (アダムそのもの)」と「最後のアダム (ここでは明記されないが明らかにイエス)」とを比較します。すなわち、「最初のアダムの体」であるこの世の朽ちる体が復活するのではなく、「最後のアダムの体」すなわちイエスの霊の体へと復活するということです。それを行う方が明記されていませんが、それはもちろん主なる神様です。

「最初に霊の体があったのではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです。最初の人土ででき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です」(1 コリ 15 : 46-47)。パウロはここで、この世の命を終えて死んだ人が、全く同じ姿で復活するのかという問いに対して答えます。朽ちると朽ちない、弱いと強い、この世の命と天、そのような対比違いを示し、そして「創世記」を引用し、主なる神様が土から造られた人間と、新たに天から造る人間という対比を、「復活」とは後者のような存在になることだと述べるのです。そのことが次の「土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです」(1 コリ 15 : 48)へとつながります。イエス様を信じる人は、土からできたものでありながら、天に属する人に等しくなるということです。そして、そうであるがゆえに、「わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです」(1 コリ 15 : 49)と「似姿」という言葉を用いて説明します。この言葉は「像、似た物」を意味する言葉ですが、パウロが引用で用いていた「創世記」の1章27節で「神にかたどって創造された」という部分のギリシア語訳の『七〇人訳聖書』にも用いられています。パウロはここで、かつて自分たちは、他の地上の生き物と同じような姿をとっていたが、将来は天上の存在と同じような姿をとるようになるかと述べています。それは、天地創造の主なる神様の「似姿」の回復でもあるということです。

パウロは、15章から「復活」について語り、それが確実であることを断言しました。そして、その根拠を示す15章1節～11節では、それが伝承であり、パウロの創作などではないことを述べました。12節～28節では、「復活」がどのようなものであるかを、様々なたとえを用いて説明しました。しかし、その説明は、決して明快ではありませんでした。それゆえ、この説明で素朴に疑問に持っていた人が納得したかどうか不明です。しかし、そもそもパウロ自身も、「復活」の具体的な仕組みを理解していて、説明しようとしているわけではないと思います。また、主なる神様を全く信じない人々に、「復活」に関する仕組

みを説明して、信じてもらおうということでもないと思います。今、主なる神様を信じているが、「復活」について納得できない人、そのような人に向けて語っています。つまり、「復活」とは、今信じている主なる神様が、信仰者一人ひとりに対して行なう事柄である。そのように受け止めてほしいと語っているのだと思います。その意味では、パウロはいろいろと説明したのですが、究極的には主なる神様を信じ、その主なる神様がイエス様の「十字架の復活」の出来事を通してなされたことを、信じるか否かについて語っているとと言えます。それゆえに、聖書日課は15章50節までですが、「復活」についてパウロが語る15章の結びで、パウロは次のように述べています。「わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」（1コリ 15：57-58）。「復活」について大切なこととは、それを理解することではなく、その出来事を通して、わたしたちを愛してくださる主なる神様に、感謝することが大切なのです。そして、それを伝えてくださった主イエス・キリストを通じた、教会でのまじわりを保つことが大切なのです。パウロはそのことを最後に伝えています。

現代の教会でも同じです。「復活」は、その仕組みを理解すべき対象ではありません。そこに主なる神様の愛が示されたことを信じるべき対象です。また、「復活」についての答えは、一般的に言って、ローマ・カトリックや正教会と、プロテスタント教会では少し異なります。「天国」あるいは「神の国」のイメージも、人それぞれ異なると思います。しかし、大切なことは、どの答えが正しいかではありません。大切なことは、「十字架と復活」の前に活動されたイエス様に出会ったことのないパウロが、「復活の証人」となったように、わたしたちも同じように信じて希望を持ち、地上の生を生きることです。

昨年の東京聖三一教会への赴任が決まり訪れたとき、紅白の梅が咲いていました。冒頭に申しました通り、今年も再び紅梅から咲き始めました。イエス様の「復活」は、梅の木のように毎年繰り返されるような自然現象ではありません。しかし、自然界のすべてに主なる神様の愛が働いていると考えるとき、わたしたちも教会の梅の木から、パウロと同じように感じられるかもしれません。しかし、大切なことは、わたしたち自身が、礼拝とまじわりを通して、「復活」を通して示される、主なる神様の愛に慰め励まされ、そして、その愛を示すことです。本日の旧約日課は、主なる神様がどのように働かれるかを示しています。福音書は、その主なる神様の愛を、わたしたちがどのように具体化するのかを、イエス様が教えています。今年も、そのイエス様の「復活」をお祝いする日が来ます。今年もわたしたちの東京聖三一教会の、ことに今年ならではの「復活」のお祝いができるように、ご一緒に準備したいと思います。